

第2節 埋蔵文化財からみた空間構成と調査成果の統合化

最後に周知の埋蔵文化財包蔵地「善得寺城跡・東泉院跡」における遺構の変遷について整理していくこととする。特に江戸時代後期における堂舎の配置を絵図との対比から復元し、さらに、東泉院歴代住持の事跡と埋蔵文化財調査成果との対比を行いたい。

原始・古代

「舟久保遺跡」に接していることもあり、弥生時代後期の遺物が1点認められる(272)。また、平安時代の遺物(260)も同様の位置づけができるよう。平成25年度に行った日吉浅間神社東側の確認調査(今泉八丁目1445番1)でも、平安時代と考えられる竪穴建物跡が検出されており、六所家敷地内における当該期の遺構は、中世以降の土地改変、言い換えれば東泉院の活動により削平されたものと考えられる。

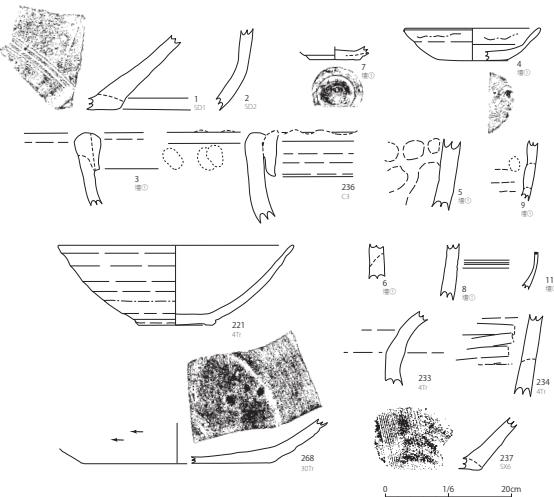
中世

13世紀の常滑産の壺片が複数出土しているが、出土遺物のまとまりが見えるのは15世紀に入ってからである。特に北東ブロックのSD1出土の1、2や北側ブロックの218、237、主屋ブロックの264、268である。まとまりがあるといつてもこの程度であるが、近世以降の大規模な土地改変の存在を考えれば、一定量の出土と

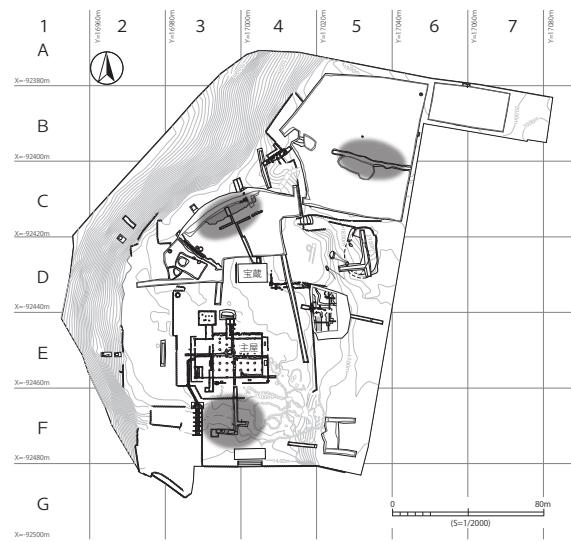


第78図 隣接地で見つかった古代建物跡

評価したい。この時期の掘り込みをもつ明確な遺構は確認できなかったが、これらの遺物が主屋北側や南側において水平面確保のための造成土中から出土していることは重要である。しかし、造成土中から15世紀の遺物が出土するということは、それ以降に造成が行われたことを示しているに過ぎない。一方で、造成土中から近世の遺物が認められないことも事実であり、前述の土地造成が東泉院の活動を直接示している可能性がある。



第79図 出土した中世の遺物



第80図 中世遺物の出土範囲

第4表 東泉院の歴史と埋蔵文化財調査成果

天皇	後奈良	今川義元	東泉院は歴代住持	事跡	埋蔵文化財調査成果	世の中の出来事	
正親町			雪山(一)	永禄元(1558)頃、東泉院は既に今泉八丁目付近に境内を構えている。 永禄3(1560)「富士山大縁起」を編纂する。			
後陽成		徳川将軍家	長仁				
後水尾		家康	1600 1603 1605	慶長17(1612)六所浅間宮宝殿・拝殿、東泉院門を建立する。	慶長6(1601) 東海道に 伝馬制が布かれ 吉原が宿駅となる	1600	
明正		秀忠	1623	慶長19・20(1614・1615)大坂の陣の際、徳川家康に酢を献上する。 以後吉例となり、毎年御歳米五十石が下される。	慶長9(1604) 慶長地震(M7.9)		
後光明		家光	1647	東泉院を醍醐寺報恩院末寺とする。 東泉院中門を建立する。			
後西		1651	快盛(四)	東泉院衆殿を建立する。			
靈元		1661	快算(五)	両界曼荼羅・大師・不動の図像、聖宝之御影図を制作。			
東山		1672 1673	快真(六) 快雅(七)	東泉院台所・土蔵を建立する。 將軍・家綱の法事に際し、納経拝礼等を勤める。			
中御門		1680	覚胤(八)	六所宮天神社・弁財天社を造立、風呂屋を建立する。	天和元(1681) 東海道・吉原宿が 現在の場所に代替	1700	
桜町		1685	圓成(九)	東泉院黒門・禁制札を建立する。子安地蔵堂・庵室を造替する。			
桃園		1691	1698	卷子本「富士山大縁起」・「富士山縁起之状」・「富士山縁起」を書写制作する。 將軍・綱吉主催の御講釈に同席、護持院で能を見物した際にも同席する。			
後桜町		1704	精海(十)	金屏風三十六歌仙を買い求める。			
後園		1709 1712 1716	家宣(十一)	東泉院境内の弁才天祠を再建、子安地蔵尊像を再興、子安地蔵堂・庵室を造立する。 東泉院客殿等を修復、文庫・經藏を代替する。屏風・諸道具を買い求める。 宝水5(1708)幕府より富士山鎮火の祈祷を命じられ、 精神のかわりに光盛が江戸へ参府し祈祷料を拝領する。	景徳鎮窯など 質の高い陶磁器を入手 焼塩壺など 武家儀礼道具を入手	宝永4(1707) 諸国大地震 富士山噴火	
光格		1745	吉宗	正徳元(1711)御室仁和寺最勝院跡を兼帶、色衣免許となる。 將軍・綱吉の法事に際して納経拝礼等を勤める。			
仁孝		1760	(賢盛)(十二)	元文5(1740)東泉院絵図描かれる。 元文5(1740)・寛保元(1741)領内で地押改(再検地)を実施する。 延享4(1747)不動五大尊護摩堂を造営する。			
孝明		1766	覚雅(十三)	寛延2(1749)肥前平戸藩主・松浦誠信から茶碗5客が贈られる。			
明治		1782 1786 1791	家治	淳盛(十四)	天明2(1782)裁許により、淳盛は着衣を剥がされ追放処分となる。 その後、東泉院は醍醐寺報恩院末寺から高野山宝性院末寺へ変更。	S E 2において 火災後の片付け痕検出	天明2(1782) 天明の大飢饉
大正		1802 1806 1812	光格	東泉院庫裏・米蔵を再建する。 寛政2(1790)火災により、客殿等焼失する。 寛政5(1793)東泉院聖天堂を再建する。 寛政9(1797)東泉院客殿を再建する。 尊淳(十六)			
昭和		1832 1837	仁孝	義嚴(十九)	寛政12(1800)女子の富士登山を許す	1800	
今上		1850 1853 1858 1864 1867	孝明	義勝(二十)	嘉永3(1850) 吉原宿に大火 安政元(1854) 安政の大地震 明治元(1868) 明治維新・神仏分離令 明治3(1870) 平民の苗字を許す		
		1886	家慶	天保12(1841)3月11日 大御所徳川家齊の法事に際して納経拝礼等を勤める。			
		1889	家定	東泉院を醍醐寺報恩院末寺に戻すか。 安政4(1857)宝蔵を再建し、庫裏を造立する。			
		1890	家茂	文久2(1862)東泉院屋敷見取図を描き、御普請役に提出する。 本堂(護摩堂・歡喜堂)と東照大権現御宮を普請する。			
		1891	慶喜	文久3(1863)2月18日 将軍・家茂が上洛の際に東泉院を宿所とする。			
		1892	良邑(葵雄)	元治2(1865)5月23日 将軍・家茂、再上洛の際にも東泉院を宿所とする。			
		1893	六所家	明治維新後、葵雄は復飾して六所良邑(六所一)と改名し、六所家初代となる。			
		1894	四郎	明治10(1877)頃 現主屋建設のために準備を始める。			
		1895	静	明治32(1899)7月 「組合立富士病院」を開設する。			
		1896	五郎	明治44(1911)3月 「組合立富士病院」は建物を解体し、廃院とする。			
		1897	1914				
		1948					
		1975					
		2009					

近世

中世末の15世紀の遺物が認められたものの、その後活動が活発になり遺構・遺物が増加するわけではなく、16・17世紀前半の遺物は少ない。東泉院は遅くとも永禄元年（1558）には今泉八丁目付近に境内を構えて、江戸時代を通じて変わらなかったと考えられているが（大高2012）、残念ながらそのことを発掘調査から追跡することはできなかった。

出土遺物から見て、東泉院の活動を確実に示していると考えられるのは、17世紀後半から18世紀前半である。それまで、出土遺物がほとんど見られなかつても関わらず、この時期に入ると、特に質の高い製品が多い。堀内氏の分析にあるように、商業ルートでは入手すること

のできない景德鎮窯の碗を入手したりと、東泉院における大名家や公家などの接應の際に宴会道具として使用したり、贈与された可能性が高い。

東泉院第九代住持圓成は、元禄4年（1691）から八年間住持を勤め、その間、江戸へ参府の際に、將軍綱吉主催の御講釈に同席し、また、別の機会には護持院の能を見物した際にも同席している。そのほかにも「金屏風三十六歌仙」を購入するなど將軍家とのつながりや東泉院の繁栄に尽力した人物と考えられる。

一方、163から165の焼塩壺は全国での出土数の四分の三が江戸遺跡、特に武家屋敷に集中しており、18世紀前半の焼塩壺は第11代住持光盛（勧栄房）の頃に入手したものと考えられる。光盛は宝永6年（1709）



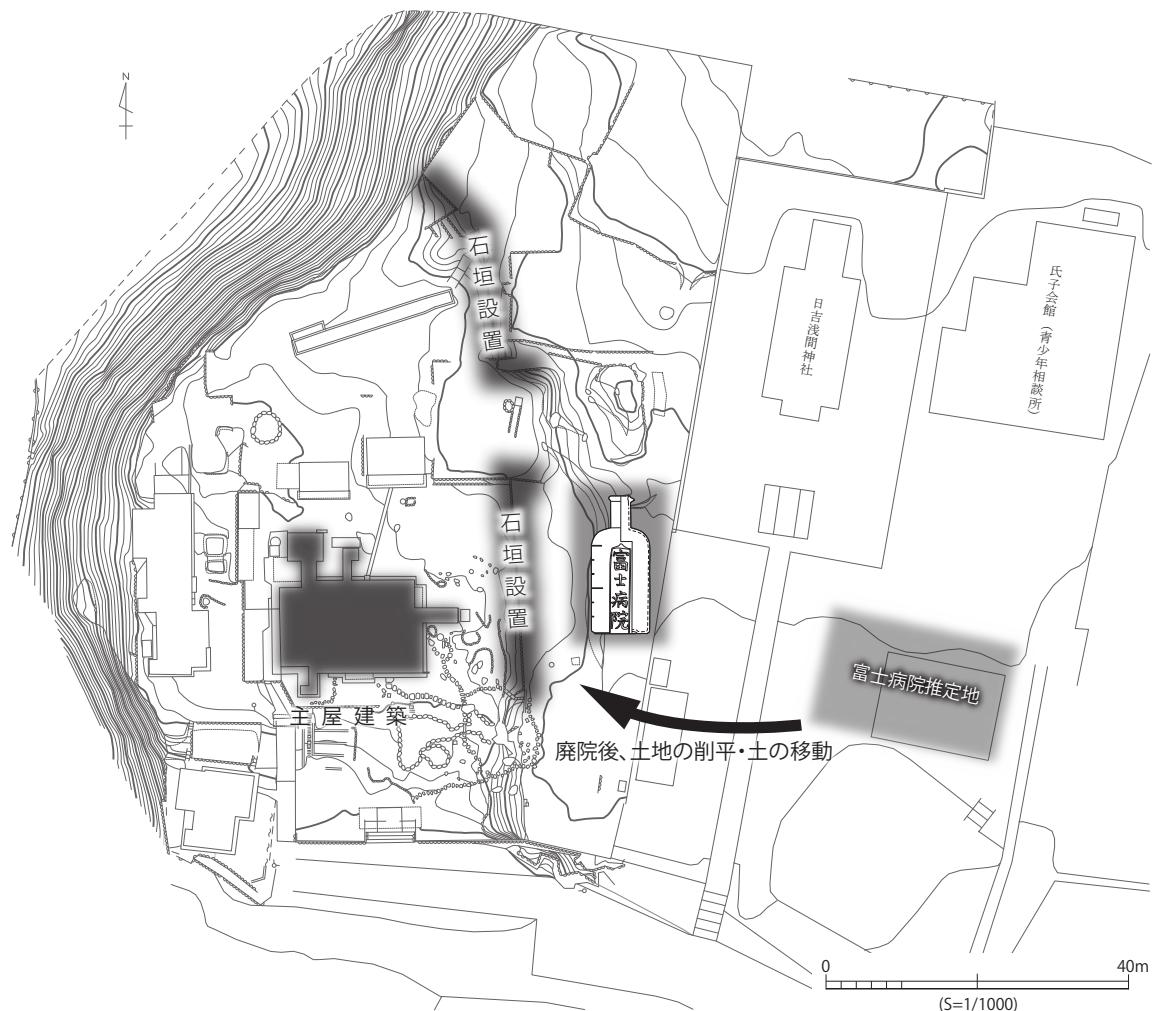
第81図 江戸時代後期（文久2年頃）の東泉院

11月に東泉院を継承し住持50年と18世紀前半に長期間、東泉院の住持を務めたことが明らかとなっている(大高2012)。住持中の正徳元年(1711)には御室仁和寺再勝院跡を兼帶、色衣免許となり、藤色紋紗の着衣を頂戴したり、元文5年(1740)から寛保元年(1741)にかけて領内で地押改(再検地)を実施したりと対内・外の宗教的・経済的活動を示す時期の住持が光盛である。

18世紀後半に入ってからはSE2において前述の17世紀後半から18世紀前半の高級品が寛政2年(1790)の火災後に廃棄・片付けされた状態で確認することができた。東泉院第14代住持淳盛(良勧房)退去後に醍醐寺報恩院末寺から高野山宝性院末寺へと変更した第15代住持隆尊(勧応房)の頃であろう。

19世紀後半では、文久3年(1863)2月18日、將

軍徳川家茂が上洛の際に東泉院を宿所とし、元治2年(1865)5月23日の再上洛の際にも宿泊している。六所家には將軍宿泊の前年、文久2年(1862)8月に「御普請役元々米倉幸内殿・増田多録郎殿」による内見分を受けた際に提出した絵図の控えが残っている。住持は第21代葵雄(探道房)のころである。この「文久建物」を建てる際に、建物を建てる部分の地面を一段高くする土木工事を行っていることが発掘調査で明らかとなった。さらに、それまでの建物配置を一新し、主屋(客殿)や門拂は、東西南北軸にあわせた配置に変更したものと考えられる。文久2年には他にも本堂(護摩堂・歡喜堂)や東照大権現(徳川家康)を祀った神社を普請していることから、大規模な境内整備を行ったものと考えられる。東照大権現御宮の造営場所は文久絵図によれば本堂北側



第82図 近代における土地利用の変化

あたりと考えられる。しかし、当時はまだ普請中であり、本堂との位置関係ははっきりとはしない。大高氏は、日吉浅間神社鳥居東側の高台がその跡ではなかったかと推定している（大高 2012）。この高台には、徳川家康による御手植の松が存在したという伝承も残っているようである。

明治時代

第 21 代葵雄は復飾し、六所良邑と改名し、六所家初代となる。現在も敷地内東側を中心として石垣が存在し、それに伴う盛土工事が行われている。盛土中から出土した医療器具のなかには、41 のピンのように「富士病院」とエンボスされたものがある。それは、明治 13 年に建設された保全病院を前身とし、明治 32 年（1899）7 月富士郡町村長会で建設した「組合立富士病院」を示しており、明治 44 年（1911）3 月、建物を解体して廃院としている（松田 2011）。そのことから、前述の大土木工事はそれ以降に行われたことが想定される。現主屋は明治 10 年頃に建築が開始されたことが明らかな事から現主屋の東端を強く意識し、石垣を含む盛土工事が行われたことが分かる。その際に、文久年間に庭としていた築山付近については、石垣設置をしなかったようで、旧地形が良好に遺存している。造営時期から、良邑氏の養子で昭和 23 年に亡くなった六所国四郎氏の頃の工事と考えられる。

参考・引用文献

- 大高康正 2012 「富士山東泉院と六所家旧蔵資料の概要」『六所家総合調査だより』第 10 号
- 菊池邦彦 2012 「富士山東泉院を訪れた人々」『六所家総合調査だより』第 11 号
- 佐藤祐樹 2009 「六所家埋蔵文化財発掘調査の中間報告」『六所家総合調査だより』第 4 号
- 佐藤祐樹 2013 「近世陶磁器からみた東泉院の活動」『六所家総合調査だより』第 12 号
- 建部恭宣 2009 「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調査だより』第 4 号
- 富士市教育委員会 2013 『六所家総合調査報告書 民俗』
- 松田香代子 2011 「日吉浅間神社境内にあった郡立病院」『六所家総合調査だより』第 8 号